

〈修士論文要旨〉

大和の渡来人

山 元 温 司*

本論では、古墳時代中期を中心として奈良県から出土する「韓式系土器」を取り上げその分布状況などについて検討を加えた。また、同様に奈良県から出土する「移動式竈」についてとりあげ、その分布状況についても触れていった。これらの結果、韓式系土器の分布では出土量の多い少ないはともかく盆地内の広い地域に分布しており、希薄な地域というものはあまり見受けられなかった。従来、奈良県における韓式系土器が出土する地域のイメージは南郷遺跡群の関係から御所市域のイメージが強いが、天理市域、橿原市域、高市郡域でも多くの韓式系土器を出土していることが分かった。

天理市域では布留遺跡、中町西遺跡、小路遺跡など多くの集落遺跡からの出土がみられた。これらの遺跡は近接していることから何らかのつながりをもっていたと考えられる。

橿原市域では藤原宮（京）内の関係から様相がはっきりしないが、韓式系土器の出土は非常にまとまった分布を示している。特に注目されるのが東坊城遺跡、新堂遺跡、内膳・北八木遺跡などから共伴遺物として鍛冶関連の遺物が出土している点である。これらの遺跡の様相は現段階ではよく分かっていないが、鍛冶工房関連の存在を示唆しているものと思われる。また、玉作りの専業集落である曾我遺跡からも少量ながら韓式系土器が出土しており、玉作りにも少なからず渡来人が関わっていたものと思われる。

高市郡域でも飛鳥宮（京）との関係から様相がはっきりしないが、韓式系土器は多く出土している。また、この地域においてはホラント遺跡、清水谷遺跡、観音寺遺跡などから大壁住居が検出されているのが注目される。これらの遺跡の時期は7世紀代に下るものもあるが、渡来人との関わりを考える上で重要なものと思われる。

御所市域では、従来からいわれているように南郷遺跡群およびその周辺地域において韓式系土器の出土がみられる。南郷角田遺跡は甲冑、刀などが生産された大規模工房、下茶屋カマ田遺跡は一般集落であるが、鍛冶やガラスや石製の玉を日常的に製作していたことが分かっている。ほかに、南郷遺跡群内の各地点で鍛冶関係遺物などが出土しており、群内において複合的な大規模生産が行われていたものと考えられている。また、大壁住居も数多く発見されている。これらの指摘からもこの地域に渡来人の痕跡を見出すことが出来、なおかつ遺跡内の手工業生産に大きく関わっていたということが確認できた。

韓式系土器を出土する遺跡の性格として特徴的なものとして手工業生産・物流の拠点（豪族居館）との関連性をあげることが出来る。東坊城遺跡、新堂遺跡、内膳・北八木遺跡、忍坂遺跡、南郷遺跡群内、脇田遺跡などからは多量の鉄生産に関わる遺物が出土しており、鍛冶関連工房の

存在が注目される場所である。また、玉作り遺跡とされる田町遺跡、曾我遺跡などからも少量ながら出土しており関連性がうかがい知れる。

韓式系土器が出土する遺跡は当時においても重要な位置を占めていたと思われる場所に存在していることから、それぞれが重要な位置を占めていたものと思われる。このような場所から韓式系土器が出土するということから、当時の王権もしくは大豪族による渡来人の計画的な配置をみてとることが出来る。手工業生産（主に鉄器生産）と渡来人の関連性については従来から指摘されていたが、物流拠点（交通の要所に配置する）としての性格は大和を中心として河内や紀伊、東海地方との関わりを考える上で重要である。先ほどあげた遺跡は海に面した大阪や和歌山、三重から奈良に至る中間点に位置していることから、先進文物の輸入ルートとしての役割を果たしていたものと考えられる。

このように韓式系土器の分布では幅広いものをみる事ができたが、移動式甕の分布は盆地北部ではあまり見られなかった。特に横穴式石室から出土しているミニチュアの甕に限ってみれば、分布は橿原市域、高市郡域、御所市域に集中しており、これらの地域における渡来系の要素はより顕著なものということが出来る。韓式系土器の分布と移動式甕の分布でみられたこのような差異は何を意味しているのだろうか。一口に「渡来人」といっても様々な地域の人がいるはずであり、それぞれの故地における風習も違うであろうと考え、この韓式系土器と移動式甕の分布でみられた違いを渡来人の風習の差ととらえ、一口に渡来人といっても様々な地域の人たちがいるはずであり、一概にはとらえられないということを指摘した。これらの結果から韓式系土器と移動式甕の分布はほぼ同じであるが、やや違う点もみる事が出来た。これらの結果から得られた地域性を韓式系土器の中でも対照的な変遷をたどっていく甕および平底鉢をみていくことで検討した。

検討の結果、甕については5世紀中葉に大きな画期を見出すことができた。甕の画期は外面調整、底部形態、底部調整、体部の沈線などにみられるものである。甕は、6世紀代においても土師器の器種として存在する。6世紀代にみられる土師器の甕では体部外面調整はハケとなり、底部形態は丸底で孔形態も楕円のもの、把手も舌状のものとなっている。この6世紀代の土師器甕へとつながる過程において、大和では5世紀中葉という時期が韓式系土器から土師器への転換期といえるのではないだろうか。5世紀中葉に位置づけられる南郷下茶屋カマ田遺跡SB177出土品では外面ハケ調整、鈍角平底、体部の沈線がみられなくなるなどそれまでの甕とは明らかに違う変化がみられる。ただ、5世紀後葉の段階においても外面調整ではタタキ調整のものがみられることや体部の沈線、把手の切り込みや刺突もみられることから韓式系土器から土師器への変化は一概に捉えられるものではない。しかし、底部形態においては5世紀後葉の段階においてもケズリがみられず、鈍角平底のものもみられることから、6世紀代の丸底化への変化がみられる。底部調整においてケズリがなくなるということは丸底化への変遷を示唆していると思われる。以上のことから、5世紀中葉の画期でみられた韓式系土器の変化する要素の中でも底部形態が一番敏感に土師器への変化を示していると考えられる。

平底鉢については5世紀前葉と5世紀中葉から後葉に画期を見出すことが出来た。平底鉢の画期は5世紀前葉に底部調整、口縁形態にみられ、5世紀中葉から後葉に外面調整、底部形態にみ

られるものである。平底鉢は土師器の器種としては定着せず、韓式系土器の中でも土師器に受け入れられなかった器種とされている。5世紀中葉から後葉に位置づけられる南郷下茶屋カマ田遺跡SB68出土品では外面ナデ調整、底部形態が鈍角平底のものになるなどそれまでの平底鉢とは明らかに違う変化がみられる。この平底鉢をみると、土師器の小形甕のような印象を受ける。このことから、平底鉢は土師器と関わっていく中で、「平底」という要素が薄れていき、6世紀代には小形甕のようなものに変化していくものと考えられる。しかし、これ以外の5世紀中葉から後葉に位置づけられるものは平底のものであり、一概にはとらえられない。

さらに、注目されるのは各遺跡における甔・平底鉢の変遷過程において時期差が生じていることである。南郷遺跡群では5世紀中葉の段階に変化の過程がみられるのに対し、中町西遺跡では5世紀後葉の段階においてもあまり変化がみられない。このことは韓式系土器が受容された各地域において独自に変化していくことを示していると考えられる。